

## 万歳とあげて行った手を大陸において来た

つ る あ き ら

# 鶴彬を知っていますか？

鶴彬（喜多一二）は1938年（昭和13年）獄中で赤痢に罹り死亡。29才。この年の4月国家総動員法公布される。

『屍のないニュース映画で勇ましい』『手と足をもいだ丸太にしてかへし』『タマ除けを産めよ殖やせよ勲章やろう』『ざん壕で読む妹を売る手紙』『高粱の実りへ戦車と靴の鋏』

1930年（昭和5年）21才。金沢第7連隊に入隊。軍隊内の暴力制裁に抗議。「無産青年」という非合法本を持ち込んだとして逮捕拘束（第7連隊赤化事件）。その後、大阪の監獄に移され1年8カ月獄中で過ごす。『いずれ死ぬ身を壁に寄せかける』

1933年（昭和8年）24才。12月除隊し軍隊生活を終えるも、つねに特高警察に監視され就職は出来ず。中国人や朝鮮人などが働く日雇い労働者として東京の底辺をさまよう。

『内地人に負けてはならぬ汗で半定歩のトロ押す』（半定歩とは日本人の賃金の半分）

『玉の井に模範女工のなれの果て』『枯れ芝よ！団結をして春を待つ』

この年の2月、築地警察署で小林多喜二虐殺。3月、日本は国際連盟脱退。

### 「可憐なる母は私を生みました」

鶴彬（喜多一二）は1909年（明治42年）かほく市高松に生まれる。

『飯粒を戴いて拾う我が母』『暴風と海との恋を見ましたか』

1917年（大正6年）8才。父病死、母再婚し上京。伯父の喜多喜太郎の養子となる。

1924年（大正13年）15才。初めて新聞の川柳欄に入選。

『燐寸（マッチ）の棒の燃焼にも似た生命（いのち）』この記念すべきデビュー句は、官憲の拷問により赤痢に罹り殺された鶴彬自身の短くも壮絶な一生を暗示している。

### 「フジヤマとサクラの国の餓死ニュース」

鶴彬は亡くなったあと、兄の喜多孝雄が引き取り盛岡市の光照寺のお墓に納められている。『胎内の動き知るころ骨（こつ）がつき』これが鶴彬の最後の句です。

しかし実際に帰ってきたのは「骨」ではなく、現地の「石ころ」だった。しかも石ころだけでも帰ってこれたのは良い方で、いまだに南方の島々や硫黄島には多くの日本兵の遺骨は取り残されたままとなっている。治安維持法で検挙された人は6万8千人。拷問死80人。獄中死114人。病気による獄中死1503人。軍人戦死者230万人。民間人死者80万人。